

公設試験研究機関評価実施報告

1 機関名

農林水産業活性化支援研究評価会議

水産研究評価会議

(水産試験場、附置機関：栽培漁業センター、内水面総合センター)

2 開催日時

研究課題評価 平成23年8月30日(火)

09:30～15:30 (プラザ萬象 多目的ホール)

3 出席者

〔委員〕

青海 忠久 (福井県立大学海洋生物資源学部 教授)
石田 行正 (独立行政法人水産総合研究センター 日本海区水産研究所 所長)
齊藤 洋一 (福井県漁業協同組合連合会 会長)
山本 忠 (福井県海水養魚協会 会長)
北村 恵子 (女性指導漁業士)
石原 孝 (福井県農林水産部水産課長：内部委員)

〔立会者〕

安達 辰典 (水産試験場長) 矢野 由晶 (水産課主任)
杉本 剛士 (水産試験場海洋研究部長) 畑中 宏之 (水産課主任)
松崎 雅之 (附置機関内水面総合センター所長) 安田 政一 (振興局二州主任)
岩谷 芳自 (附置機関栽培漁業センター所長) 嶋田 雅弘 (振興局若狭主任)
吉田 覚 (水産試験場管理室長) 前田 英章 (海浜自然センター企画主査)

〔実施主体〕

水産試験場

〔説明者〕

(研究課題評価)

渡 智美 (水産試験場海洋研究部研究員)
梅津 寛之 (水産試験場海洋研究部研究員)
渥美 正廣 (水産試験場海洋研究部主任研究員)
松崎 賢 (内水面総合センター主任研究員)
河野 展久 (水産試験場海洋研究部主任研究員)
杉田 顕浩 (水産試験場海洋研究部主任研究員)
鮎川 航太 (水産試験場海洋研究部主事)

〔事務局〕

清水 弘明 (水産試験場企画支援室長)
杉田 顕浩 (水産試験場主任研究員)
河野 展久 (水産試験場主任研究員)

4 評価範囲

(1) 事前評価課題 (3 課題)

- ①ズワイガニ資源増大対策事業 (水産試験場海洋研究部)
- ②福井の水産物「見える化」技術 (水産試験場海洋研究部)
- ③海況情報提供事業 (水産試験場海洋研究部)

(2) 中間評価課題 (2 課題)

- ①梅投与によるハダムシ等寄生虫抑制技術の実用化事業 (水産試験場海洋研究部)
- ②トラフグ簡易性判別技術開発支援事業 (水産試験場海洋研究部)

(3) 事後評価課題 (4 課題)

- ①寄生虫予防技術開発事業 (水産試験場海洋研究部)
- ②県産水産物の鮮度管理・保持技術の開発 (水産試験場海洋研究部)
- ③地域漁業管理総合対策の推進 (水産試験場海洋研究部)
(アナゴかご・筒漁業の管理手法開発)
- ④ふくいアユあふれる河川創作事業 (附置機関内水面総合センター)
(アユ生息環境調査事業)

(4) 追跡評価課題

該当なし

5 総評概要

(1) 研究課題評価

事前評価 3 課題については、A 評価 1 課題、B 評価 2 課題で 73.9 点以上であった。

中間評価 2 課題については、B 評価 2 課題で 84.5 点以上であった。

事後評価 4 課題については 61.7 点以上であった。

評価結果

(1) 研究課題評価

①事前評価

研究課題名	研究期間	研究目的および必要性	総合評価	主な意見
ズワイガニ資源の増大対策	H24～28	ズワイガニ好漁場形成要因および保護礁内の資源構造の解明 ・サイドスキャンソナーを用いて広範囲の海底地形を映像化し、資源量調査結果と関連付けて好漁場マップを作成する。 ・サイドスキャンソナーとカニ籠を用いて保護礁内外の資源状態を追跡調査し、魚礁の設置が再生産に与える影響を明らかにして資源増大効果を評価する。	A	・現在の年間500トン前後の横ばい状態からまだ増大が望めるものかどうかの評価が最も大切 ・調査で得られた結果をズワイガニ資源評価や資源保護措置にどのように結びつけていけるかが問題 ・福井県の冬の味覚を代表するズワイガニの資源増大は必須課題であり、非常に重要性の高い目標と認識している。県民や漁業者の関心も高い。サイドスキャンソナーの調査を期待する。
ふくいの水産物「見える化」技術	H24～27	鮮度管理方法や品質を目で見える形で評価する必要があるため、水産物の鮮度・品質の見える化技術開発と、見えるデータの提供のための研究を行う。 ・漁業者グループの行う商品力アップの取り組みを、試験データで補強することによりレベルアップ ・水産物の品質情報(脂ののりや旨み成分)の季節変化を調査し、消費者に情報提供	B	・漁業者の取り組んでいない新しい手法や経済効果を是非把握評価すること。 ・仲買人にその違いを実感してもらえば、本事業の目的は半分達成してもらえたことになる。 ・「見えるデータ」と市場評価をよく検討すること。 ・魚価対策として非常に重要な課題であり、緊急性も高い。研究成果を速やかに現場で普及できるようにして欲しい。
海況情報提供事業	H24～26	実用的に活用できる海況情報を提供するために、リアルタイム海況データの取得、若狭湾周辺海域に特化した海況予測モデルの開発及び情報配信システムの構築を行う。 ・リアルタイム観測ブイの設置 ・若狭湾周辺海域に特化した海況予測モデル(福井県版海況予測モデル)の開発 ・漁業者ニーズにあった情報配信システムの構築	B	・予測精度を向上させ、リアルタイムの海況もモニタリングして漁業者の携帯端末への情報提供を行う画期的な研究である。 ・迅速な海況情報は漁業者にとって必要不可欠であり、操業の決定や人身保護にもつながる事であり、必要な課題である。 ・大変重要な研究事業であるので、コスト意識も働かせながら、長期間のメンテナンスをどのように確保していくのかについても検討を加えてほしい。 ・若狭湾沿岸に立地する原子力発電所の事故の際などにも、放射性物質が海でどのように拡散するかの推定をするのにも役立つと思う。

②中間評価

研究課題名	研究期間	研究目的および必要性	総合評価	主な意見
梅投与による寄生虫抑制技術の実用化事業	H23～25	<p>養殖場において梅果汁による実用化試験を行い、県内のトラフグ養殖業者に技術の普及を図る。また、ハダムシを対象として抑制効果の検証試験を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・養殖業者による実用化試験（効果の把握） ・ハダムシ感染試験（抑制効果の検証） ・費用対効果の検討 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・梅ジュースの供給可能量、梅ジュース製造保管方法、コスト計算、養殖トラフグの味の比較など、実用化の中で検討すべき項目をさらに精査すること。 ・養殖業者の期待が大きいため、実用化試験を通して問題点を明らかにして着実に解決して欲しい。
トラフグ簡易性判別技術開発支援事業	H23～26	<p>価値の高い雄のトラフグ（若狭ふぐ）を効率的に生産するため、種苗生産現場での実用的な雌雄判別手法および雌雄別の養殖技術を開発する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・処理時間の短縮方法 ・雌雄別養殖試験（雌雄別での成長、生残、成熟を把握） ・雄の成熟促進試験 ・経営調査（雌雄別養殖の経営シュミレーション） 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・実用化するためにはオス、メスそれぞれの用途特性の解明、雌雄別飼育の生残や成長を明らかにするとともに、種苗生産したオストラフグの性成熟を促進する技術を確立すること。 ・成長と成熟を促進させて魚価を上げる試みに期待したい。 ・漁業者の期待の強い、白子のできる雄の成熟を早める成果を期待している。

③事後評価

研究課題名	研究期間	研究目的および必要性	総合評価	主な意見
寄生虫予防技術開発事業	H20～22	薬に頼らない安全安心な方法によるトラフグの養殖技術を開発し、寄生虫による被害の軽減と若狭ふぐへの付加価値向上を図る。 ・青梅果汁を餌に添加することで寄生虫を抑制できるかを検討。	B	<ul style="list-style-type: none"> ・青梅果汁を用いた餌料費全体のコスト削減について青梅の調達も含めて十分な検討を行い今後の実用化に向け研究を進めること。 ・梅果汁の地域特産品を利用してトラフグ養殖の寄生虫対策で一石二鳥。薬品を使わないので食の安心安全にもつながる。 ・本技術開発の必要性は大きい。青梅果汁を用いた餌料費全体のコスト削減について十分な検討を行い今後の実用化に向けて貢献して欲しい。
県産水産物の鮮度管理・保持技術の開発（サワラの品質管理と利用の推進）	H20～22	サワラの県内での生食普及と加工利用の増加など県内利用の推進を図るため、鮮度管理・保持技術の検討・改善・開発、品質特性に応じた加工品の開発など利用方法の検討を行う。 ・定置網漁業における鮮度管理実態を把握 ・鮮度管理手法の比較試験（鮮度管理技術を検討） ・出荷試験（鮮度管理技術の有効性を把握） ・簡易測定器を用いた鮮度、脂質の品質測定技術を開発 ・サワラの脂質、呈味成分の把握	B	<ul style="list-style-type: none"> ・現場で問題となるのは、漁獲量の大半を占める小型のサゴシサイズの魚価向上と利用の促進である。開発された技術をサゴシに応用すること。 ・漁業者が積極的に進めている鮮度管理・保持の取組みが市場から高い評価を得られるよう、研究成果の公表、普及を進めること。 ・経済的効果の評価できるように数値化できると良いと考える。 ・鮮度管理、品質保証に経費がかかりすぎて高価にならないか。
地域漁業管理総合対策事業（アナゴかご・筒漁業の管理手法開発）	H19～22	アナゴ漁業について、適正な漁獲サイズ、許可制度の見直し等に資するため、アナゴの資源特性、漁業実態等の把握、分析およびアナゴ筒漁具改良等の調査を行う。 ・アナゴ漁業の実態の把握 ・資源特性の把握（資源の再生産の可否の検証） ・県内市場における評価（価格形成の把握） ・以上の踏まえたアナゴ資源の効率的利用法の検討	C	<ul style="list-style-type: none"> ・本県海域ではマアナゴの資源管理は必要性が高い。知見の少ない日本海側のマアナゴの資源実態解明に貢献し、福井県独自の資源管理手法を検討した積極性は高く評価したい。 ・小型魚の保護策など資源管理手法の開発を底曳網漁業へも展開していく必要がある。 ・自主規制をしている地域もあるので、その取組みを後押しできる。
ふくいアユあふれる河川創作事業	H20～24	アユ遡上量に大きく影響を及ぼす仔稚魚の生態やアユの漁獲と河川環境との関連を明らかにし、海産系アユ資源の増大を図ることを目的とする。 ・モデル河川におけるアユの漁獲調査 ・モデル河川における漁場環境調査 ・仔稚魚生態調査	B	<ul style="list-style-type: none"> ・他府県の調査も参考にして、調査の精度をもっと向上させる工夫を重ねること。 ・沿岸域での生態と環境要因の関係が重要だと思われる。今後とも沿岸域での調査研究を継続して欲しい。 ・河川環境の改変を行い、その結果がどのようにアユの生息数や成長を改善したかを明らかにする試みが必要。